

じんけん

JINKEN
第162号
(通巻 289号)
2025年3月18日発行

INDEX

県人教事業より 2	県人教専門委員より 9
第40回臨時総会を開催	「先生だからといって偉いわけではない ただ先に生まれただけやろ」 県人教専門委員 吉岡 賢二さん
県人教事業より 3	こどものまなざし 10
第4回部落問題学習実践講座を開催	「いつかはクラウン！」 中津地区高校 3年 Y・Mさん
県人教事業より 4	コラム 11
出前オープン講座	「いじめ問題」がつきつける課題 (5) ー人権教育の構築のためにー ～寺澤 亮一さん～
連携事業 5	INFORMATION 12
2024年度九州・沖縄地区子ども支援ネットワーク交流学習会 わたしたちが未来をつくるために	第18回ヒューライツ作品展 入賞作品の紹介
県人教専門委員より 6	
乳幼児期からの性教育をとおして 県人教専門委員 田邊 タカさん	
県人教専門委員より 8	
子どもたちに突き付けられた言葉… 県人教専門委員 河野 清人さん	



 公益社団法人
大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

大分県大分市大字下郡496-38 大分県教育会館内
TEL: 097-556-1012 FAX: 097-556-0864

URL <https://kjkoiita.jp/wordpress/>
E-mail hello@kjkoiita.jp



◀大分県人教の
ホームページは
こちら

印刷 小野高速印刷(株)

第40回臨時総会を開催

2025年2月20日（木）午前10時から大分県教育会館の201研修室で、31の地区研究会代表が参加しました。役員は藤田一樹代表理事（会長）他7名の理事、監事2名が参加しました。

議長には豊肥地区社会人権・部落差別解消教育研究協議会の藤島勲さん、竹田人権・部落差別解消教育研究会の大塚正朗さんを選出し、以下の4議案について事務局が提案しました。

- | | |
|-------|------------------------|
| 第1号議案 | 2024年度事業並びに会計中間報告に関する件 |
| 第2号議案 | 2025年度事業計画に関する件 |
| 第3号議案 | 2025年度収支予算に関する件 |
| 第4号議案 | 正会員、賛助会員募集に関する件 |



第1号議案では、進路保障にかかわる各種調査では、2024年3月に高校等に進学しなかった子どもが107人いたが10月の追跡調査で進学や就職した子どもが16人になり中学や地域行政の支援が続いていること、2024年度中途退学が801人で過去最高であること、公正選考に係る違反事項は9件8社について申し入れできたことなど紹介しました。また、ヒューライツフォーラムは通常の対面形式で開催し、965名が参加し、15の分散会で30本のレポート討議したこと、部落問題学習実践講座でフィールドワークや懇談会ができたこと、県人教ホームページでは各種研修会等の案内や学習資料等の情報を公開し、必要な情報を必要な時に確認できるように随時更新していることなどについて報告をしました。1号議案については、各種調査の意義と取り組みへのつながりの重要性について意見が出ました。その後、承認されました。

第2号議案2025年度の事業計画では、HF2025が佐伯市で、九同教夏期講座は佐賀市中心で、全人教研究大会は大阪府と兵庫県で開催されること、部落問題学習実践講座の充実、乳幼児期教育の充実に向け人権・部落差別解消保育講座の開催、ニュースじんけん6回発行、オープン講座・出前講座6回開催、大分県人権教育・部落差別解消推進課や当事者団体などとの連携の強化など、重点事業の提案をしました。

3号議案2025年度収支予算については、会員数減の傾向、通信運搬費・研究大会要員弁当代・研究大会会場使用料とシャトルバス代等の高騰を踏まえて、経常収益に定期預金の取り崩し収入408万円を設定した事を説明しました。

4号議案では、正会員と賛助会員の加入促進に向け、今まで以上に各地区研究会と連携して正会員を募集し、県行政の関係課職員への働きかけ、県人教理事・監事推薦団体や教育諸団体に賛助会員募集を働きかけていくことを提案しました。

質疑・意見はなく、2号議案、3号議案、4号議案は承認されました。



第4回部落問題学習実践講座を開催

1月30日の午後から大分県教育会館201研修室にて開催し、18名(校種別では小6名、高9名、特支1名、社1名、保護者1名)の参加がありました。

事務局からは、今回の講座で各自の実践レポートを中心に実践交流する狙いについて説明しました。討議してほしいこととして下記の5つをお願いしました。

- ① どこに部落問題、差別、人権課題があるのか？
- ② 子どもの気持ち、保護者の気持ちや願いをくみとっているのか？
- ③ 個人の思い込みでしていないか？
実際にしたこととその時の関係者の思いを把握できているか？
連携があるのだろうか？
- ④ 子ども、保護者、教職員の変わり目や展望はどこにあるのだろうか？
- ⑤ 部落問題に直接的に関わらないレポートについても部落差別解消推進法の第5条「地域の実情に応じ、部落差別を解消するため、必要な教育および啓発を行う」を考慮し、報告者や参加者の部落問題との出会いや過去の部落問題学習実践を出しあって意見交換をしていく。



全体会では、最初に宇佐高校の永野智久さんから「第75回全国人権同和教育研究大会の報告を終えて」と題して、2007年に初めて全人教研究大会に参加し、生徒と保護者に関わる中で、もがき、自らの生き方を問い直す教員がいることを知れたこと、その後、永野さんも自己の差別性を語り、生徒とつながる取り組みしていること、部落にルーツのあることを知った生徒の葛藤に向き合うことについて報告がありました。

続いて、竹田高校の杉崎淳さんは「みんなの立場宣言」と題して、部落出身の生徒が入学し、その保護者から部落問題の捉え方について学んだこと、その生徒が「私の主張（弁論）」大会の原稿で「部落出身であり、一人になっても強く生きる」ことについて書いてきたことで、どのように学校として立場宣言を支えていったのか、また、ある教員の生徒への言動が人権の視点からどのような問題があり、どう向き合ったのかを報告しました。

その後、3～4人のグループを5班つくり、各自のレポート発表、討議をしました。参加者の感想を抜粋ではありますが、いくつか紹介させていただきます。

- ・ レポートに出てくる保護者と意見交換でき、それぞれの思いを語り合うことができてよかった。
- ・ L G B T Qの子どもと実際に関わっていることを聞き、配慮すべきこと（更衣やトイレ等）がたくさんあると感じた。
- ・ 実際に体験、実践した方の話を聞いていつも思うのは、「熱が伝わる」ということです。
- ・ 班でレポート発表して、質問の答えに詰まる自分がいて、そこに差別性があるのだと思った。
- ・ 立場宣言によって周りの意識を変えることを期待する以外に、本人の気持ちの中に（部落出身としての誇りを持ち）「自分のことを伝えたい」という熱い気持ちがあることが見えてきた。
- ・ 4回の研修会を通じて人権教育担当者になった私にとって不可欠なエッセンスを学べた。
- ・ この4回の学習は、これまで聞くことができなかった生の声を聞け、交流することの大切さを学ぶことができた貴重な場であった。



出前オープン講座

2月17日（月）に竹田市総合社会福祉センター多目的室にて出前オープン講座を開催しました。出前オープン講座は各地区研究会と連携して、地域の課題解決に向けた体制を考えていくことが目的です。講師は、部落の子どもをはじめさまざまな子どもたちの支援活動をおこなうドリームチルドレン代表の小西幸恵さん。『人権が大切にされる社会をめざして』という演題で、参加者同士の対話を大切に人権について学びの時間となりました。参加者の感想を一部紹介します。



ムラの方とお話をする、自分がいかに無自覚に差別をしていたかを思い知らされて、がく然とします。けれど、ひとつひとつ指摘いただく中で考える機会を持てることはありがたいです。だから、学ぶことは続けないと、と思います（なかなか自分を変えるのは難しいですが）。何もしないことは、加差別だと思うので。

マジョリティとマイノリティということからいろいろと考えさせられました。無意識の思い込み、無自覚の差別は自分の中にも必ずあると思います。それに気づくためにも今日のように学習をつんでいくことが大切だと感じました。今日学んだことを伝えていきたいと思いました。

社会の中で構造的に存在する差別や、日常で感じたそれに類する違和感に対して、被差別当事者でないからできること、マジョリティの立場としてできることなど、声を上げていくことが大切だと感じた。

マイクロアグレッションという概念が、私たちのいろいろな思いとつながることで、差別問題を深く考えることになる話でした。一人ひとりの捉え方が、差別解消につながるとよいと思いました。

自分の“ふつう”をふり返るチャンスをいただきました。また自分の“考え方”“あり方”もふり返ることができました。「おかしいな」とか「はあー！？」って思ったことを周りの人と共有してみる、話題にしてみることを早速やってみようと思います。「差別をしなくてもする人」になれるよう、このような研修会に可能な限り参加して、常に“今の自分”をふり返り続けたいと思います。たくさんのキーワードをいただきました。早速、この後職場で共有、周知します。



2024年度九州・沖縄地区子ども支援ネットワーク交流学習会

県人教事務局員 了戒 隆輔

わたしたちが未来をつくるために

と き 2024年12月7日(土)
ところ 沖縄県那覇市

目 的

九州・沖縄における子どもたちの確かな育ちと学びを支援する取り組みの実践内容と成果について交流し、それぞれの取り組みの充実に資する。九州・沖縄における子ども支援ネットワーク（教職員をはじめ、関係機関、行政、NPO、NGOなど、子どもの育ちに関わるさまざまな立場の人たちの役割分担と協働の取り組みとしての、子どもたちへの多角的な支援のつながり）の充実を図る。

開会行事

- 主催者挨拶 九州地区県同教連絡協議会（九同教） 会長 有光 洋
『沖縄こども白書』の取り組みは、同和教育とつながっている。
- 趣旨説明 実行委員 幸地 一
本交流会のあゆみを報告



実践報告①

相談コーナーから始まる修学支援 ～すべての子どもの自己実現に向けて～ 福岡 田中 博通さん

2007年の4月、入学式を控えた朝「入学を辞退したいのですが」と母親からの電話が入った。これまでの取り組みの課題が明らかになり、そこから奨学金制度とそれに関わる取り組みが、さまざまな子どもたちの修学保障へとつながっていた。子どもや保護者の願いから、取り組みをさらに確かなものにしていくきっかけとなった。

行政説明

沖縄県こども未来部 こども若者政策課 課長 島津 典子さん

『「誰一人取り残さないこどもまんなか社会」の実現を目指して』と題して、国の施策から県の取組や実態把握、支援について説明があった。また、質疑応答では、現場の状況も伝え合うことになった。

実践報告②

産業連携コーディネーター 小美野 夏代さん

「不登校生徒へのキャリア教育プログラム」と題して、子どもたちが将来を見据えたロールモデルを探し、学校と地域で連携した事例が紹介された。

うるま市田場区自治会長 天願 力さん

かつて公民館と子どもの姿が見られなかった。現在、公民館にさまざまな人が集まり、関わることで、子どもたちは公民館で宿題をして、公園で遊び、市役所の放送で帰る子どもたちがいっぱいとなった。公民館は子どもたちの元気な声で溢れている。



ワークショップ

グループを編成し、それぞれが関わっている子どもやおとなの現状や課題、悩みや疑問点を出し合い、さまざまな立場の参加者と課題解決に向けた意見交流を行った。

●まとめ 実行委員長 加藤 彰彦

こども基本法の理念「こどもまんなか」が具体的に伝わっていない。具体的なつながりの中で享受し、もう一度、学校・地域の中からまちづくりをすすめていく必要がある。

乳幼児期からの性教育をととして

県人教専門委員 田邊 タカ

実践をはじめ きっかけ

自分自身が性教育と出会い学んでいく中で、性教育は自分のことを知るだけでなく、他者との関係性をつなぐ学びであることを知り、だからこそ乳幼児期からの取り組みが大切だと思い、子どもたちや保護者、職員と共に学びの環境をつくっていかうと考えた。

I 期【4月・5月】 ～奇跡の誕生！～

○受精から誕生するまでを知り、その不思議さや自然のすごさ、自然科学的な仕組みを自分なりに感じたり気づいたり知ったりする。

○成長することへの期待や喜びを感じる。

子どもの気づき



- ・お母さんのおへそと赤ちゃんのおへそはつながっているんだよ！
- ・えーっ最初の赤ちゃん小さすぎる～！
(8週・3ヶ月・6ヶ月の胎児人形を触ってみて)
- ・じゃあ、女の人はおしっこしないの？(出産の方法を聞いて)
- ・赤ちゃんの首がゆるゆるで、どうやってもったらないの？
(誕生した新生児人形を抱っこして)
- ・僕も、赤ちゃんに服を着せてみたい！
(大人が新生児人形に服を着せているところで)

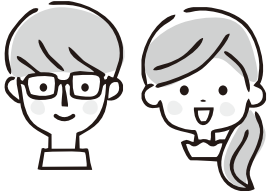


Ⅱ期【6月～8月】 ～自分の体を知ろう！～

○体の共通点や相違点、その働きを知ることで、身体のことや健康について興味関心を持つ。

○排泄の仕方や体の洗い方を知り、自分の体を大切にする気持ちを育むと同時に、自分の体も友だちの体も同じように大事なことに気づく。

保護者の声



- ・性器の洗い方を教えることなんて考えたこともなかった。子どもの間は、親が洗ってあげるものだと思っていた。
- ・我が子が見かけで判断されたり、逆に判断したりする場面があり、子どもにどのように伝えるのがいいのかいつも悩んでいた。
- ・普段話さない“性”について、話せることが大事なんだと感じた。
- ・自分のことなのに、知らないことがあるんだと気づいた。子どもと一緒に学べてよかった。

Ⅲ期【9月～12月】 ～自分の大事な体と心！～

○プライベートゾーンを知ること、自分の体は自分だけの大事な身体であることに気づく。また、誰にとっても自分と同じように大事であることを感じる。

○人にはうれしいや楽しいなどのいい気持ちばかりでなく、違和感や怒り、不安や悲しみなどいろんな気持ちがあって、どれも大切な自分の気持ちであり、どんな気持ちも表現していいことを知る。

子どもの声



- ・温泉に行ったときは、知らない人もいるけど裸になってお風呂に入るよ。
- ・鉄棒で回ったり、渡り棒で逆さになった時、服がぺろ～んってなって勝手にお腹とか見えることあるよ。
そんな時は仕方がないよね～。
シャツを入れたらいいんじゃない。
- ・トイレに行ってるの見られたらいやだ！

Ⅳ期【1月～3月】 ～成長したね！～（今後の取り組み）

○等身大の自分を描いて成長を感じたり、髪型や服装などを自由に描くことで、好きな自分を見つけたり描いたりすることを自分なりに楽しむ。

○お互いの作品を見たり思いを聞いたりすることで、共感したり自分と重ね合わせたりして、これまでの自分とこれからの自分に思いを巡らせる。

〈実践をふりかえって〉

子どもたちが性について科学的に正しく理解し、適切に行動が取れるように、そして、性の被害者にも加害者にもならないために学びをつくろうと始めた性教育だった。この取り組みをとおしてその他にもたくさん気づかされたことがある。それは保育・教育の実践は、みんなが同じように考え、同じように思いをもつようにすることが目的ではなく、科学的に正しい知識を知りその土台に立って、自分の思い考えをもち、自分らしく生きていくための力やエネルギーをつくっていくことが大切なのではないかということ。園生活の中で、どんな思いも自分らしく表現している子どもたちの姿から、いろんな子ども（人）がいることを考えずに、ただ画一的に保育・教育を進める身勝手さを反省する。子どもと共に思いを出し合い、学びをつくっていく姿勢であるか、自らを振り返り、進むことの大切さを知った取り組みとなった。

子どもたちに突き付けられた言葉…

県人教専門委員 河野 清人

教員になって二十数年。子どもたちに突き付けられた言葉がずっと忘れられない。

何度言っても体操服を持って来ない子に「あんた、王様じゃねえんで！」と言ったら「先生だって王様じゃねえんで」と言われた。教科書もノートも出さない子に「ぼくは、どうしたらいい。まったく取り組まんのはどうしてなの！」と凄んだら「だって、授業が早い…」と泣かれてしまった。修学旅行の班決め（提案）を実行委員会で話し合っていたら「どうせ最後は先生たちが決めるんやろ…」と。

この他にも山のように忘れられない言葉があるが、そのすべては、私（大人・学校）の価値観を足場に発した時に返された言葉である。私自身、強制、統一させられるのは嫌で、理由や声を聴いてもらえないことには苛立つ。なのに、子どもたちの声を聴こうとせず、「なぜ、しないのか?」「ここまでやったのに…」というこちらの枠に入らない子どもたちの言動を目の当たりにした際、私の枠の中に入れようとしてしまう。そして、その度、子どもたちは、わたしの指導の中にある理不尽さを見抜き、「それは違うよ」「もっと事情を聴いてよ」「なんでわかってくれないの!」と訴えてきた。その時は、ムカツと来るが、よくよく考えると子どもたちの主張の方が妥当であった。そして、その言葉の数々がわたしの価値観、実践を振り返らせ、わたしを立ち止まらせた。

わたしたちは、立場上、子どもたちを「指導」する。が、指導には「拒否」がセットであると先輩に言われたことがある。拒否なき指導は、強制であるということだろう。また、ある先輩は、「指導」は、子どもたちの声の中にあると言った。子どもたちは、荒れや無気力という姿で、わたしたちに「もっとこうしてほしい」と願い、訴えているのである。それは、わたしたちに何かを「呼びかけ」ているということだ。それをどう読み取り「応答」するのが「指導」であり、そこに思いを馳せることが今問われている気がする。

数年前、衝撃的なデータを見た。それは、日本を含めたアジア数か国の十代の子どもたちに「あなたの国に解決したい社会問題がある」「その社会問題を解決できると思うか」と尋ねたアンケートであった。日本は、他国と比べて圧倒的に低い数値だった。この子どもたちの多くは、少なくとも日本の小中高校をくぐり抜けている。そして、わたしもそこに居る。わたし（たち）が学校でしていることは、子どもたちから多くのものを奪っているのではないかと思った。

わたしが学校にいる意味は、何なのだろうか。子どもたちの可能性をどれだけ引き出し、学校が子どもたちにとって意味のある場所になっているのか。子どもたちが私に突き付けた言葉は、すべてわたしへの「異議申し立て」である。そこに、子どもたちの願いがあり、そこに人権がある気がする。わたしたちもさまざまなものを奪われ、生きづらさを感じ、日々息苦しい中で這いつくばっている。そして、それは、たぶん子どもたちも同じである。そうであるならばきっと手を結べる同志のはず。子どもたちの声を聴き、学校が子どもたちとわたしたちにとって意味のある場所となるよう微力ながら希望を忘れず、顔を上げていきたいと思う。

今年度、書写の時間に、書きたい書体の字を選んで書く授業をした。授業後、ある子が「あ～、楽しかった!」とつぶやいた。その子は、書道教室に通っているのに…。そこで、「〇〇さんは、習字ならってるでしょ?」なのに、どうして『楽しかった!』なの?」と聞くと、他の子が答えた。「そんなん当たり前やん。だって、自分で選んで自分が書きたい字を書けるんやけ」と。ここにもまた子どもたちが置かれている現実と願いがあると思った。この言葉もまたひとつ子どもたちに突き付けられた言葉として忘れずに、子どもの声を聴こうとする大人になりたいと思う。言うは易しですが…。

「先生だからといって偉いわけではない ただ先に生まれたただけやろ」

大分県人教専門委員 吉岡 賢二（三重総合高校）

このタイトルは私が生徒の時にいつも先生に対して思っていたことである。体罰が行われていた時代だった。高圧的な物言いで自分の思う通りにさせる先生、ルールを守れ、時間を守れと言いながら自分は守らない先生など、生徒に厳しく自分に甘い先生が嫌いだった。そういう私も体罰をする怖い先生にはおとなしく言うことを聞き、優しい先生にはなめた態度をとっていたが…。

自分が先生になるにあたり、生徒とは対等に接するようにしたいと決意していた。しかし、実際に採用され多忙の中でその初心はすっかり忘れてしまっていた。

新採用で最初に務めた学校はいわゆる進学校だった。管理職、進路主任、学年主任からとにかく国公立大学の合格者数を出すように言われ、プレッシャーを受けていた。私もそれが正しいと信じていた。難関大をめざしていた生徒がある日突然「先生、志望校を下げます。昨日家族会議で決めました」と言ってきた。その発言にカチンときた私は「なんで俺に一言も相談もなく決めたんか！」と叱責した。それまでクラスのさまざまなことを頼んだり頼まれたりと信頼関係ができていたその生徒は、私の言うことを一切聞かなくなった。2～3か月たって「なんでそんなに態度が悪くなったん？」と聞いたところ「先生はあの時僕の気持ちを全然聞いてくれなかったですね。担任だったらまず、『なんかあったんか？』と聞くべきじゃないですか」と言われた。まさにその通りで、クラス全体の結果、自分に対する評価のことばかり考え、まったく生徒が見えていなかったと反省し謝罪した。

いまだに高校現場は国公立大学の合格者数にこだわられてないだろうか。そのことが推薦や受験先に影響していないだろうか。生徒の立場にたって考え、生徒の思いはどこにあるのかを見極め進路選択に優先していきたい。

「みなさんは定員内不合格についてどう考えていますか。私は反対です」

豊肥地区では竹田市や豊後大野市と連携した進路学力保障連絡協議会（以下「進保協」）の組織がある。主な活動は困りを抱えている生徒を支えていくための小中校の連携づくりや、高校入試での公正選考の依頼などである。今年度も12月に中学校の担当者が本校を訪れ、私と一緒に校長に面接等で不適切な質問をしないことと、定員内不合格を出さないことの申し入れをした。

約20年前、3年生の担任の時、ある生徒をA大学（国立大学）へ推薦した。ルーム長をしており、私の代わりにクラスをまとめてくれるとても信頼していた一押しの生徒だった。しかし、結果は定員内不合格であった。私は定員割れしたことが分かり合格を確信していたので、とてもショックだった。生徒本人も号泣していた。しかし、それ以上にA大学への怒りが大きかった。定員を満たすことができなかったのに、不合格を出すA大学、A大学はそんなに偉いのかと。今でも忘れられない。そんな気持ちがあるので、高校入試での定員内不合格にも反対である。定員内不合格は“教育を受ける権利”を奪うことになると思う。学びたい、学ばせたいという子どもの思いや保護者の願いに寄り添ってほしい。だから、私は定員内不合格に反対である。



こどものまなざし

このコーナーでは、人権作文集「ひかり」に掲載された作品を紹介していきます。子どもたちが日常生活の中で考えたこと、感じたことなどにふれ、子どもたちの姿から学んでいきたいと思います。

「いつかはクラウン！」

中学3年生のころ、最悪な日々を過ごしました。校内でいじめに遭い学校に行かない日が続きました。毎日毎日家にこもり続け、母を困らせていました。ことあるごとに母は「私は勉強してこなかったことを後悔しているのよ。」と話していました。だからそのこともあり「学校に行かないとちゃんとした仕事に就けないよ!」と私をいつも叱咤激励してくれました。心の底ではわかっていただけ素直になれず、生返事で受け流し、「うるさいなー!学校に行ったら行ったでいじめられるだけやん!」と心の中で叫び返し、母の賢明な忠告を他人事のように聞き流す日々が続きました。時々担任の先生が私の様子を聞くために電話をかけてくれても、母にだけ対応を任せ、自分は電話に出ることすらしませんでした。そんな私を見て母はあきれた表情で、「いい加減学校に行きなさいよ!」と説得してきますが、「行って何になるんか、行きたくない!」と反発し、ひどい言葉を投げ返してばかりの私でした。

そんな日々がしばらく続きましたが、次第にこのままの状態であることが不安になってきました。頭の中で、母の言葉を何度も何度も繰り返すうちに、さすがにこのままではいけないと焦りはじめ、やっと勇気を振り絞って学校に行く決心がつかしました。「学校に行きてー。」と母に伝えたら、すぐに学校に連絡し連れて行ってくれました。でも駐車場に到着し降りようとすると体が緊張し行きたくない気持ちに支配され、車を降りられなくなりました。すると母が担任の先生に連絡をし、先生に「やれる範囲で頑張って、無理だったら帰っていいよ。」と言われると、気持ちが少し楽になり、教室に向かいました。その間ずっと後ろに先生がついてくれました。教室の前まで来て不安で立ち止まった私に「大丈夫、大丈夫!」と何度も励ましてくれ、やっと入ることができました。

久しぶりに教室に入ると、クラスの生徒がみんな私を一斉に見るので、突然怖くなって足がすくみましたが、「今までの自分を変える!」と思い直し、自分の席に向かいました。その日から学校に行くことができました。勇気を振り絞って登校するようになると、不思議なことにいじめも気にならなくなりました。

そんなある日、進路のことで担任の先生と面接し、「高校はどう考えている?」と聞かれました。母に相談してみたところ、「定時制はどうだろうか。」と言われ、受験科目を調べてみると学科試験の他に面接と小論文があることを知り、「勉強が苦手なおれにできるだろうか……。」と不安になりました。母は、「受けるだけ受けてみたら? 定時制は働きながら学校なので、大変だけどやってみたらいいやん!」と強く背中を押されました。それから受験勉強に頑張りました。心配した高校受験も準備の甲斐があって、合格することができました。

入学式までは不安でいっぱいでしたが、実際に入学したら優しい先輩方が迎えてくれ、クラスの仲間たちとも仲良くやっていける気持ちになりました。

将来の目標が2つあります。1つはクラウンを買うことです。セダンの高級車に乗ってみたいです。そのために卒業したら定時制機械科で身に着けた知識や技術を生かし、機械部品メーカーに就職し、給料を貯め、クラウンを買って彼女とドライブに行きたいです。これが一つ目の目標です。もう1つは、今、絶望の中にいる昔の自分と同じような境遇の人に、「心がけを変えることができれば生き方も劇的に変えることができる。」ということ伝えて、励ますことができる人間になりたいです。これが二つ目の目標です。

卒業まで1年以上あり道半ばですが、中学校の頃のあの絶望の日々とは決別できているとしみじみ思います。もうあの頃には絶対戻りたくないです。そのためにはこれからも毎日職場や学校で1日1日、一つ一つのことに頑張る、周囲の人に頼られる人間になりたいです。そして、「いつかはクラウン!」

人権作文集ひかり2024【第36集】

中津地区高校 三年 Y・Mさんの作品より

人生、進まなければと思っていても前に進めないときがあります。Y・Mさんは、自身の内からの力と、さまざまな人の外からの支えで、立ち上がり、前に進むことができました。Y・Mさんが、「やれる範囲で頑張って」みようとすることが、前に進むことに大きくつながったように思います。

人生、今、うまくいってなくても、未来のことはわからない。人生をあきらめずにいること、生きていくことに希望を感じさせる作品です。

「いじめ問題」がつきつける課題（５） ～寺澤 亮一さん～ －人権教育の構築のために－

他者の欠点にこだわらない自分を育てること

前々号で次のような考えを述べました。

例えば、クラスに「いじめ」のグループがあったとしたら、そうしたグループをむしろこちらから絶縁するべきです。仕返しをしたいなどと考えるはいけません。そんなグループを捨ててしまうことです。怪我をさせられたのなら訴えればいいのです。そして人から好かれ信頼される自分を研いて、「真友」をつくる努力をこそ心がけましょう。もちろん「いじめ」のグループが変容して、「いじめ」のグループでなくなったら、その時は普通に付き合えばいいだけのことです。

「むしろこちらから絶縁するべきです」と強い言葉で述べました。その考えは少しも変わっていませんが、少し付言をしておかねばなりません。

それは「あなたはあなたの世界で生きてください。私は私の世界で生きていきます」という関係をつくるということで、敵対していくことはありません。

いやだなと思う人であっても「おはよう」という「あいさつ」はするべきだと思います。いくら避けたいと思っても学校や学級が同じです。それに敵対していくわけでもありません。だとしたら「おはよう」というあいさつはするべきです。

「あいさつ」は他の人と出会って生きていく術を身につけるトレーニングです。学校は、いやだなと思いつきたいと思う相手と暮らしながら、人間関係を学んでいくトレーニング場でもあります。他者の欠点にこだわらない自分を育てていくトレーニングだと思えばよいでしょう。

「ばらばらでいっしょ、差異（ちがい）をみとめあう社会」というスローガンに出合ったことがあります。性格や体力や趣味や嗜好や特技など、さまざまなちがいをもった人たちと出会って、私たちは大きな人間に育っていきます。人権教育の場では「ちがいを豊かさに」というスローガンを掲げていますが、多文化共生の枠をもっと広げて考えていかねばなりません。

「偏差値」一辺倒からの脱却を

「いじめ問題」を軸にして人権教育の構築を考えてきました。この項を終わるにあたって「同和教育がめざしてきた子ども像」を「全同教」の文書から抄出しておきます。また、子育てについての考察も呼びかけます。

「部落を解放する教育内容の創造と、学習の保障のために」から －1972年－（全同教）

1. 部落問題を中心に、自然や社会について科学的で人間的に豊かなものの見方、考え方をもっている。
2. 現実の問題を打開し未来にむかってすすむことのできる、ものの見方、考え方をもっている。
3. 個人の利益と幸福の追求とともに、集団の利益と幸福のために行動し実践していくことのできる力をもっている。

小中学校では、学習成績の評価とともに「行動の記録」が次のような観点で評価されています。

基本的な生活習慣、明朗・快活、自主性・根気強さ（自主・自立）、（向上心）、責任感、創意工夫、思いやり、協力性（寛容・協力性）、自然愛護、勤労・奉仕、公正・公平、公共心（ ）は中学校

子どもへのはたらきかけ、投資、しつけなど、あなたの力の入れ方具合を点検してみてください。

（A＝力を入れている・B＝願っているが子ども任せ・C＝あまり考えたことはない）

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| ①勉強がわかる子になってほしい。 | （ A ・ B ・ C ） |
| ②スポーツの技能が身に着く子になってほしい。 | （ A ・ B ・ C ） |
| ③親や家族の気持ちがわかる子になってほしい。 | （ A ・ B ・ C ） |
| ④友達の悩み、苦しみ、痛みがわかる子になってほしい。 | （ A ・ B ・ C ） |
| ⑤社会生活のルール、しきたり、知恵などがわかる子になってほしい。 | （ A ・ B ・ C ） |
| ⑥宗教的文化、情操、いのちの重さがわかる子になってほしい。 | （ A ・ B ・ C ） |

寺澤 亮一

INFORMATION

第18回ヒューライツ作品展 入賞作品の紹介

ヒューライツ作品展に対して、県内各地よりたくさんの応募ありがとうございました。2024年度のテーマは「日常の自然とのであい」でした。日常の自然とのであいがいろいろな形で表現されていました。テーマに沿って審査を行いました。入賞した作品を紹介します。



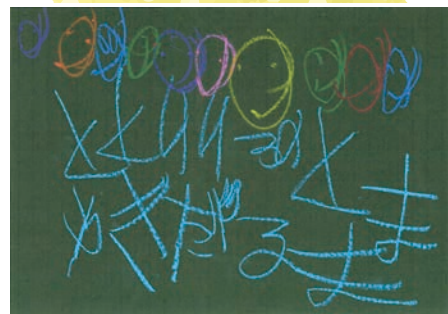
「それー！」
三苫 靖 (日田市)



「海との出会い」
林 理恵 (佐伯市)

「にこにこ雪だるま」

河野 颯真 (佐伯市)



「これに決めた。」

宿利 友香 (杵築市)



「桜に届くかなあ」

牧 久美子 (大分市)



「あめあがり」

河野 環子 (日田市)



「なんかいいにおいする。」

大田子ども園 (杵築市)



入選されました7点の作品は、2025年度の県人教事業の中で、学習・啓発の具体的なイメージとして活用させていただきました。ヒューライツ作品展は次年度も開催します。テーマが決定しましたらご案内いたしますので、たくさんのご参加お待ちしております。

こちら編集部

さまざまな研修、多くの実践報告に出会った1年でした。「自分もよく似たことがあった」、「わたしはこんなふう生きてきた」講師、報告者、会場の声に自分自身を“重ね”思いが引き出してくる。その思いを伝え合う営みを大切にすすめていきたい。

(りよ)